あとがきにかえて
人間の深層を破壊させないために
――東北・関東大震災の死者たちの冥福を祈って。福島原発は世界に警告している。

私の深層の記憶の一つは、父母の田舎の太平洋に面した福島県いわき市薄磯の浜で従兄妹たちと海水浴をしたことだ。小学校入学前だったので、荒波は私の背丈の何倍もの高さから落ちてくるようだった。その波に巻き込まれると揉みくちゃにされて浜辺まで押し上げられてしまうのだった。塩辛い潮水の思い出は、私の身体の奥深くに刻まれている。塩谷埼灯台下の広い砂浜の上には高い堤防があり、その近くには腰の曲がった祖母が笑いながらこちらを見つめていた。

たった十数日ほど前に、大津波がやってきて海岸線の従兄妹たちが暮らしていた集落は、根こそぎ波にさらわれてしまったと親族たちから聞いている。伯父の実家を守っている従兄は、命だけは助かった。また従妹の一人は、福島県双葉町に嫁いでいるので、同時に発生した福島第一原発事故の後にその地を離れて親族の家に身を寄せているという。

二〇一一年三月十一日の午後二時四十六分ごろ、宮城県三陸沖で起った巨大地震は、大津波によって三万人もの死者・行方不明者を出して、さらに被害数は増え続けている。また福島第一原発の六基のうちの四基の冷却装置が破壊されてしまい冷却されないため、1・3・4号機が水素爆発を起こし建屋が破壊され、放射能を放出してしまった。燃料棒のプールは、その後に海水を直接注入しているので少し安定してきた。しかし本体である原子炉圧力容器の燃料棒が冷却されずに溶け出して溶融（メルトダウン）し圧力容器が最悪の場合に破壊される可能性もまだ否定することは出来ない。マグニチュード9・0の巨大地震と巨大津波が発生したことは事実であり、三陸沖では今までも大地震は起っていて、私には地震によって原発が破壊されることは想定外の出来事ではありえなかった。それは次の一九九九年十二月に刊行した「コールサック」（石炭袋）三十五号に発表した詩「カクノシリヌグイ」と二〇〇二年一二月に刊行した四十四号に発表した「シュラウドからの手紙」によって、福島原発の根本的な問題点を指摘しながら、父母の故郷がいつの日かチェルノブイリになってしまう危機感を詩にしていたからだ。福島原発や東海村の原発など日本の原発は十年に一回は大きな事故を繰り返しているので、二〇一〇年前後に私は大きな危機意識を感じていた。その意味で私にとっては想定外の出来事ではなかった。きっと私以外でも、例えば詩の中で紹介したノルウェーの反核運動家のように原発の危険性を真剣に考えている者であれば誰でも、日本の原発がいつ福島原発のような事態になっても不思議ではないと考えていたはずだ。その二篇の詩を引用してみる。

カクノシリヌグイ

1

秋／手賀沼の水辺に咲くイシミカワ／その淡緑色の小さな花と／葉っぱの皿に盛られた／葡萄のような実は／緑白色／紅紫色／青藍色／その色の重なりを眺めていると／北の海と空の色を思い出す／なぜイシミカワと呼ばれるのか／水辺に美しい石の実が生ると／古代人もめでたのだろうか

2

腰の曲がった祖母が堤防近くで見ていた／砂浜の風が日中の熱を下げていった／夏休みに魚の行商を手伝い／夕焼けの海はしずかに暮れていった／「青年になって戻ってきた」と／叔父は高校生の私を歓待してくれた／ここから三十キロ北の浜辺で／その年に原子力発電所が稼働したのを／私はあとから知った／翌年祖母が亡くなり／長く海辺を訪ねることはなかった

3

クラゲが原発を止めるという／核分裂の高熱を冷ます海水に／クラゲが紛れ込む／放射線に当たりクラゲが被曝したら／やはり青い色に発光するのだろうか／石炭を掘り尽くした地は／ウランの核エネルギーを選ばされた／都市のために地圏を汚しはじめた／私は原発事故の記事を／いつしか切り取るようになっていた／父と母が見捨てた地からの／唯一の伝言のように

4

叔父が死んだ／三十年ぶりにあの海を見た／叔父と走った浜辺の記憶が蘇ってきた／私が陸上部で長距離ランナーだと知って／「叔父さんと走るか」と言って駆け出したのだ／叔父の後を追いかけながら海を見た／海と水平線と空はイシミカワのような／深い色を重ねていた／祖母を葬った海辺の墓地は山へ移された／かつての墓地は公民館に変わっていた／そこで叔父の娘の一人から／冷えた酒を注がれた

5

新聞記事が伝えていた／原発は寿命三十年だといわれてきたが／いつのまにか五十年から六十年に延ばされたことを／熱疲労、金属疲労、ビーチマークの破断に至る可能性は／どれくらい高くなったろうか／／虚偽報告／裏マニアル／核分裂連鎖反応／制御不能／臨界事故／／アルファ線／ガンマ線／ベータ線／中性子線／ＤＮＡ破損／／その時、人の血肉に／放射線が貫通して暴れた／肉体が放射線状化するとどうなるか／今も遺伝子が傷つき変容していること

を／神さえも知らない

6

イシミカワの近くに／少女の頬紅のような可憐な花が咲く／ママコノシリヌグイと／ミゾソバの花は／少し離れると区別できない／茎に下向きの刺のあるのが／ママコノシリヌグイだ／古代の少女をいじめた義母の悪意は／どんな刺よりも残酷か／小さな花に少女の薄紅色と義母の刺を／同時に見た古代人がいた／ミゾソバはウシノヒタイとも言われる／葉っぱが牛の顔に似ているからという／牛の顔に囲まれた花は／幸せな古代の少女のようだ

7

原発は／義母の悪意のように／地球の皮膚を放射線で引っ掻いた／いまも無数の生傷が絶えない／古傷は腐り融け出しそうになっている／東海村のことを話し始めると／「原発に囲まれた日本は、もう手遅れね」と／ノルウェイの森からやってきた女性がつぶやいた／制御不能なものを安全だといい続けた／二十世紀の神話は／東海村の水辺でも死滅した／二十一世紀にも／カクノシリヌグイという／悪の花をぞくぞく水辺に咲かせるだろう／誰も近寄れない／死に至る花を／つぎつぎ決死隊が摘みに行くのだろうか

8

私たちは忘れた／自然光を／私たちは忘れた／無数の光の豊かな階調を／私たちは忘れた／無数の風景の影と光の境界を／私たちは忘れた／自然光が内部に宿り／素顔に輝き始める瞬間を／風が自然光と戯れ／樹木がいっせいに葉音を立て／水辺が波立ち／ミゾソバの花や／イシミカワの実が落ちて／遠く流れ去るのを／人の首筋から／生きる喜びに満ちた／光と影が発する瞬間を

9

アリゾナ州のレッドバレーで／インディアンの末裔が放射線を浴びながら／広島長崎に使用された原料と同じように／先祖の土地からウランを掘りつづける／イギリスの詩人ワーズワースや／ピーターラビットの絵本の故郷カンブリア近く／セラフィールド再処理工場付近で／白血病が多発しつづける／フランスのラ・アーグ再処理工場でもそうだ／あかつき丸は再処理されたプルトニウムを運び／世界の海を危機にさらしている／東北の果て青森県六ケ所村は日本の全ての／カクノシリヌグイをさせられるだろうか／核の墓場を押しつけるものは誰か／現代のエネルギーの義母は／どんな刺よりもいたく／体内で暴れ回る残酷さだ／無尽蔵の電気を享受して恥じないもの／自然光の美、驚きを忘れた／私たち人間の影を消し去ろうとする／存在の根源的な暗さだろうか

10

私は父母の故郷　東北の海辺で／今も叔父と一緒に駆け出すだろう／カクノシリヌグイの／「青い花」の幻影にめまいして／イシミカワのような／深い色を湛えた海を見るために／行商の汗をぬぐい／甥っ子の成長を祝福した／叔父のやさしい瞳の自然光を／忘れないために

シュラウドからの手紙

父と母が生まれた福島の海辺に／いまも荒波は押し寄せているだろう／波は少年の私を海底の砂に巻き込み／塩水を呑ませ浜まで打ち上げていった

波はいま原発の温排水を冷まし続けているのか／人を狂気に馴らすものは何がきっかけだろうか／検査データを改ざんした日／その人は胸に痛みを覚えたはずだ／その人は嘘のために胸が張り裂けそうになって／シュラウド（炉心隔壁）のように熱疲労で／眠れなくなったかも知れない

二〇〇〇年七月／その人はシュラウドのひび割れが／もっと広がり張り裂けるのを恐怖した／東京電力が十年にわたって／ひび割れを改ざんしていたことを内部告発した／二年後の二〇〇二年八月　告発は事実と認められた

私はその人の胸の格闘（ひびわれ）を聞いてみたい／その良心的で英雄的な告発をたたえたい／そのような告発の風土が育たなければ／東北がチェルノブイリのように破壊される日が必ず来る／福島第一原発　六基／福島第二原発　四基／新潟柏崎刈羽原発　三基／十三基の中のひび割れた未修理の五基を／原子力・安全保安院と東京電力はいまだ運転を続けている／残り八基もどう考えてもあやしい

国家と電力会社は決して真実を語らない／組織は技術力のひび割れを隠し続ける／福島と新潟の海辺の民に／シュラウドからの手紙は今度いつ届くのだろうか／次の手紙ではシュラウドのひび割れが／老朽化した原発全体のひび割れになっていることを告げるか

子供のころ遊んだ福島の海辺にはまだ原発はなかった／あと何千年たったらそのころの海辺に戻れるのだろうか／未来の海辺には脱原発の記念碑にその人の名が刻まれ／その周りで子供たちが波とたわむれているだろうか

私はこの二篇の詩と他の東海村原発事故のことを記した詩「一九九九年九月三十日午前十時三十五分」などの原発事故や原爆に触れた詩九篇をⅢ章に収録した詩集『日の跡』を二〇〇三年八月に刊行した。一九九九年九月の東海村の原発事故で作業員の大内久さんと篠原理人さんの二人が「青い光」を浴びて八十日以上も苦しみながら死んでいった。私はこの事故に触発されて「カクノシリヌグイ」を書いたのだった。その動機には、故郷の福島で仮に東海村のような事故が起ったら十基もの原発が並んでいる福島は、壊滅的な情況になるだろうと私のような専門外の者でも直観できたからだ。なぜなら一九六〇年後半の私が中学・高校生ごろに、福島で原発が作られた頃から原発の危険性は、原子力に関わった研究者たちから指摘されていた。その中心人物が原子力情報資料室代表の高木仁三郎だった。彼は、〈原子力とは「消せない火」である〉と語った。その「消せない火」である原子力を発電に使うことの本質的な問題点を多くの本に書き、反原発運動を行ったが二〇〇〇年に癌でなくなってしまった。けれどもその志を継ぐ原子力情報資料室は今も健在で、客観的な放射能に関わるデータを発信してくれて、今回の事故においても最も頼りになる情報を発信している。それらの資料によると福島原発は初期のものは四十年以上も経ち老朽化が進み、危うい発電を続けながら、この数年の内にあと二基を増設しようと計画している。新潟の活断層の上にある柏崎刈羽原発もいつの間にか七基にもなり強大な発電能力を備えている。国家・東電・日立や東芝などの原発メーカーなどの推進派は、危険性に耳を塞ぎ、恐るべき意思で原発を拡大させている。

一九九九年は私にとっても大きな決断をした年だった。韓国の高炯烈さんと出会い、『長詩　リトルボーイ』の翻訳を「コールサック」三十五号に掲載開始したり、また『浜田知章全詩集』を企画刊行したいと決意した年でもあった。

私にとって福島原発は、私の深層である掛け替えのない故郷を破壊する恐るべき文明の暴力として感じられていた。またその原子力産業を支える国家・行政組織、電力会社、原発メーカー、ゼネコン、その下請けの数多の部品メーカー、従業員の命を顧みないメンテナンス会社など巨大な利権の王国のように思われた。戦前の日本帝国参謀本部に操られた軍隊のように破滅しなければ気付くことのない原発神話に洗脳された巨大組織連合体だった。市民の視点で原発の危険性を指摘していた少数の高木仁三郎のような原子力の専門家たちの警鐘を無視して、その危険性を直視することなく、推進した政治家、多くのマスコミの経営陣たち、評論家たち、記者たち、原子力の学者たちはその危険性を想定外として封印してしまったのだ。原発の安全神話による「想定外の危険性」をタブー視する風潮が蔓延し、原発を既成事実化する現状においてこの原発事故は引き起こされた。この悲劇が現在も進行中でどこまで被害が及んでくるのか計り知れないものがある。原発を推進したものたちは、自らの責任を明らかにして、原発の問題点を認識し、他の発電の可能性を探る努力を開始すべきだろう。そうしなければ原発の現場で放射能を今も浴びている作業員や空気・水・土壌・海を放射能汚染されたそこで暮らす福島県などの人びとに報いることは出来ないだろう。

これらの悲劇を根本的に乗り越えて行くには、国内の建設中・建設予定の十数基やベトナム、トルコなどに輸出する計画をすぐに中止するだけでなく、福島原発を含めて日本の五十四基の原発を順次廃炉にしていくしか選択の余地はないだろう。また電気を空気のように無制限に使用し原発に依存するしかないと思っている一部の日本人の考え方を転換させるしかない。もちろんその前に今回の事故で山河、田畑、海岸の水も空気も土壌も放射能で汚染されてしまい原発がどんなに取り返しのつかない危険な発電であるかを多くの人々は学習しただろう。原発と人間は共存できないことを徹底的に認識することが最も大切なことだ。そんな不遜なことを続けて原発で有り余る電気を作り続けることは破滅的な行為なのだ。そう考えてこれから行動しなければ、原発事故で亡くなった作業員、今も被曝し続けている多くの人びとの苦悩に報いることはできないだろう。巨大地震・津波によって引き起こされた福島原発の情報は世界中を駆け巡っている。「すべての原発を停止せよ―福島は警告している」との横断幕を掲げてドイツのベルリンなど四都市で20万人が集まる反原発集会が三月二十七日の新聞で報道されていた。このことから福島原発の教訓が世界の文明の根本的な問題点を抉り出したと言える。

この脱原発の流れを日本から粘り強く発信し続けたい。現在公募中の『命が危ない』詩選集に3・11の悲劇を刻むために、タイトルを『命が危ない　三一一人集』とし、締め切りも五月末日に延ばして、大震災・津波・原発事故をテーマとした詩篇を多くの詩人たちに書いてほしいと願っている。

私の深層の中にある反原発や脱原発の本質的課題とその未来を語ることでこの詩論集『詩人の深層探求』のあとがきと代えさせて頂きたい。先に触れた『長詩　リトルボーイ』や『原爆詩一八一人集』を実現するために私は出版社を作った。と同時に全国の詩人たちの第一詩集から最新の詩集や詩論集までを論じた詩人論である栞解説文を差し挟んだ詩集・詩論集・エッセイ集を刊行したいとも考えた。本書に収録した二章の詩人論の大半はそのようにしてこの五年間に書かれたものである。一章の講演文と三章の書簡文は、私の実践的な詩論でもある。

最後に本書で論じさせて頂いた多くの詩人たち、「コールサック」を長年支援して下さっている詩人・作家・芸術家の皆様、また私の詩誌や本作りを支えてくれているスタッフの佐相憲一、亜久津歩、千葉勇吾、上原恵、杉山静香たちと私の家族に深い感謝の思いを伝えたい。私はそれらの人びとから生かされ、生きる場を与えられているのだと心から思っている。

二〇一一年四月三日